

# 特別支援学校(肢体不自由)における食に関する指導についての調査研究

佐藤 杏香

## I 問題

近年生じた様々な食の問題に取り組むべく食育基本法(内閣府,2009)が制定され、子どもが豊かな人間性をはぐくみ生きる力を身に付けていくためには、何よりも食が重要であると記された。食育とは、家庭を中心に学校、保育所、地域その他のあらゆる機会と場所を利用して、食に関する理解を深めることとされている(内閣府,2009)。本研究では、学校教育の一環として行われる食育の指導のことを「食に関する指導」として定義する。

肢体不自由児の食に関する課題は多岐にわたり、摂食指導上の課題(厚生労働省,2004 他)、栄養面での課題(東京東療育センター,2010 他)、食経験の不足(山田,2008 他)や障害の重度・重複化による問題(高橋・今野,2008)が挙げられる。しかし、肢体不自由児を対象とした食に関する指導の先行研究は摂食指導が中心となっている。実際の指導内容も「手洗い・衛生の習慣」、「正しい姿勢や道具の使い方」など給食指導を中心に組み入れる内容(土屋・山下・青山,2013)に偏りがちであり、給食という場面から離れた指導になるとやや消極的になるという傾向がある(村上・松下(金尾)・山本・笠間・射越,2012)と指摘されている。児童生徒の実態に合わせた指導を実施するためにも、より幅広い内容を学校の教育活動全体を通して指導していく必要がある。このことから、指導の実態を明らかにし、学校の教育活動全体を通して実践するための工夫を検討することは意義あることと考える。

## II 目的

特別支援学校(肢体不自由)における食に関する指導を学校の教育活動全体を通して実践するために、以下の2点を明らかにする。

- 1 特別支援学校(肢体不自由)における食に関する学校体制と指導の実態及び教師の意識
- 2 食に関する指導を学校の教育活動全体を通して実施するための工夫

## III 研究 I

### 1 目的

特別支援学校(肢体不自由)における食に関する指導に対する学校体制と指導の実態、教師の意識を明らかにする。

### 2 方法

全国の特別支援学校(肢体不自由)155校の小・中・高等部において、準ずる教育課程・下学年適用又は知的障害代替の教育課程で学ぶ児童生徒の担任教師を対象に調査依頼を行い、研究協力が得られた54校の教師176人に郵送による質問紙調査を実施し、返信があった44校の教師132人の結果を集計した。調査には土屋ら(2013)を参考に作成した質問項目から予備調査を経て確定した①対象教師の属性と食に関する指導の学校体制、②現在指導している児童生徒1人の実態、③教師と栄養教諭・保護者との連携、④食に関する指導の実態、⑤食に関する指導に対する教師の意識、の質問項目を用いた。

### 3 結果と考察

学校体制において、栄養教諭の配置は専属と他校兼任を合わせ7割であった。これは、栄養教諭の配置が義務的なものではなく、各学校の設置者に判断がゆだねられている(中央教育審議会,2004)現状が影響していると考えられる。「学校栄養士」「栄養士」「管理栄養士」であれば配置されているという回答もあったことから、栄養教諭の前身の職種によって補われていることが考えられる。食に関する指導の目標を含む学校の全体計画の作成は約8割で行われていたが、目標だけが立てられている学校もあった。各学部の食に関する指導目標は、どの学部でも6割ほど作成されていた。このことから、学校で立てられた食に関する指導の全体計画が、各学部の取り組みにまで繋がっていない学校もあることが示唆された。また、一部の学校内・学部内では計画や目標の作成の有無で教師間の認識にずれがあることがわかった。

表1 児童生徒の食生活における課題(複数回答 n=96)

項目	人	%
正しい姿勢や道具の使い方	46	47.9
食事の時間・スピード	40	41.7
嚥下・咀嚼	38	39.6
食事マナーやルール	34	35.4
好き嫌い	30	31.3
卒業後の食生活	27	28.1
食経験の不足	19	19.8
偏食	18	18.8
健康との関わりの理解	18	18.8
肥満	17	17.7
手洗いや衛生の習慣	16	16.7
感謝の心の育成・あいさつ	13	13.5
食品・栄養に関する知識	13	13.5
食を楽しみ味わうこと	12	12.5
やせ	10	10.4
朝食欠食	9	9.4
こだわり	8	8.3
調理などの技術	8	8.3
食文化の理解	4	4.2
その他	7	7.3

表2 実施している食に関する指導内容(複数回答 n=86)

項目	度数	%
正しい姿勢や道具の使い方を習得する	64	74.4
手洗いや衛生の習慣を習得する	61	70.9
食事マナーやルールを習得する	60	69.8
食を楽しみ味わう	56	65.1
感謝の心の育成やあいさつを習得する	50	58.1
食事の時間・スピードを改善する	48	55.8
健康との関わりを理解する	48	55.8
好き嫌いを克服する	42	48.8
嚥下・咀嚼の機能を習得する	38	44.2
食品・栄養に関する知識を習得する	36	41.9
偏食を改善する	33	38.4
食経験の不足を補う指導	33	38.4
調理などの技術を習得する	30	34.9
卒業後の食生活について学ぶ	29	33.7
食文化を理解する	28	32.6
肥満の改善や予防をする	25	29.1
こだわりを改善する	22	25.6
朝食欠食を予防する	16	18.6
痩せの改善や予防をする	16	18.6

この原因としては、教師の中でも計画の作成に携わる人が一部であり、計画の作成を把握していない人がある(磯部ら,2009)と推察される。

食に関する指導の実態では、その多くが給食の時間に行われていることが明らかになった。児童生徒の食生活上の課題として、「正しい姿勢や道具の使い方」、「食事の時間・スピード」といった給食の時間で実感しやすい項目は上位に上がったものの、「調理などの技術」、「食文化の違い」など、日常生活からわかりにくい項目はあまり課題と感ぜられていないことが明らかになった。また指導として実施されている内容では、先行研究と同様に、「正しい姿勢や道具の使い方」、「手洗いや衛生の習慣」についての指導が上位に挙げられた。反対に「朝食欠食の予防」や「痩せの改善や予防」の指導が実施内容として教師が挙げた項目の中で最も少なかった。

児童生徒の生活上の課題と実施されている指導の内容について、全19項目を平均値が高い方から上位、中位、下位と分けて比較した。「正しい姿勢や道具の使い方」は、課題としても最も多く挙げられ、指導としても最も多く実施されていることが明らかになった。しかし一部、課題と指導内容にずれが生じていることも明らかになった。「好き嫌いを克服する」、「嚥下・咀嚼の機能を習得する」、「卒業後の食生活について学ぶ」、「肥満の改善や予防をする」の4項目は、児童生徒の課題として感じている教師が多かったものの指導実施が少ない項目であった。反対に「手洗いや衛生の習慣を習得する」、「感謝の心の育成やあいさつを習得する」、「食を楽しみ味わう」、「食品・栄養に関する知識を習得する」の4項目は、教師が児童生徒の課題としてはそれほど感じていないものの、指導しているという回答が多い項目となっていた。

表3 食に関する指導に対する教師の意識 (n=132)

項目	平均値
継続的に食に関する指導を行うことは重要である	4.65
「食事の重要性や喜び、楽しさを理解すること」を重要視している	4.21
食に関する指導を自身が重要視している	4.14
「心身の健康を管理する能力」を重視している	3.87
「食事のマナーなどを含む社会性」を重視している	3.79
「感謝の心」を重要視している	3.66
食に関する指導の成果を感じられる	3.48
食に関する指導の内容を選択することが難しい	3.25
「食文化の理解」を重視している	2.98
「食品を選択する能力」を重視している	2.87
多忙のため、食に関する指導を設定することが難しい	2.60
保護者との連携が困難である	2.56
食に関する指導の目標を考えることが難しい	2.54
栄養教諭との連携が困難である	2.30
食に関する指導は何を指導していいかわからない	2.24
食に関する指導は栄養教諭の仕事である	1.88

課題として挙げた教師が少ないながら指導実施が多い項目に関しては、通常学級や特別支援学校を対象に調査した先行研究の結果では、「衛生面」や「食事マナー」は積極的に取り組まれている(村上ら,2012;鈴木,2015)という報告があり、本研究(土屋ら,2013)においても同様の結果が見られたことから、指導内容が固定化してきている可能性が示唆された。課題として挙げられながら指導実施が少なかった項目に関しては、発達段階などの理由からまだ指導できないことや、指導が固定化しているため課題とずれてしまっていることが考えられた。後者の場合は改善の必要性があると言えるだろう。

教師の食に関する指導についての意識においては、指導自体を継続的に行うことや「食事の重要性や喜び、楽しさを理解すること」を重要視していることがわかった。しかし、「食に関する指導の内容を選択することが難しい」と感じている人が多く、「食文化の理解」、「食品を選択する能力」については比較的重要視していないことも明らかになった。これは「食に関する指導の内容を選択す

る」ことが難しく(山田,2008)、“食育で学んでほしいこと”として「食文化の理解」、「食品を選択する能力」の順位が低いという先行研究(野田・鎌田,2013)の結果と同様であり、未だに改善されない課題であることが示唆された。

## IV 研究II

### 1 目的

特別支援学校(肢体不自由)における食に関する指導に対する学校体制と指導の実態、教師の意識の詳細を事例的に明らかにし、学校の教育活動全体を通して食に関する指導を実施するための具体的な工夫について検討する。

### 2 方法

研究Iにおいて、食に関する指導内容が幅広く取り上げられ、かつ給食以外の場面でも指導が実施されていたA県立B特別支援学校と、C県立D特別支援学校の教師1名ずつに調査を依頼し、両校共に学校を訪問して半構造化面接を行った。両校共通の質問項目として、①食に関する指導を重要視するようになったきっかけ、②内容の精選

方法、③児童生徒の食に関する経験の状況について尋ねた。さらに、B 特別支援学校の教師には、食に関する指導の現状、D 特別支援学校の教師には、学校の教育活動全体を通して実施する上での工夫、保護者との連携について加えて尋ねた。

### 3 結果と考察

2 人の教師はともに栄養教諭がない中で学校の食に関する指導を運営する立場にあり、現在又は過去に教師同士で情報を共有して熱心な指導を実施した経験があった。先行研究では、教師の食に関する指導への認識に差がある(三反田,2011)中で、教職員間の連携が重要である(鈴木,2011)ことが明らかになっている。このことから、立場上食に関する指導について深く考え、教師間で連携することにより食に関する指導の具体的なイメージを持った教師であったと推察された。

また、指導を実施する上で肢体不自由特別支援学校特有の困難さとして、記録する書類が多く多忙であり、食形態の違いから実施できる指導内容の検討が難しいということが挙げられた。そうした状況の中、食経験の不足の課題や将来必要になる力を考慮して内容の精選や配慮を行っていたことも明らかになった。

学校の教育活動全体を通じた実施のための工夫としては、これまでの年間指導計画を活用すること、複数の教師で案を出し合って授業を計画すること、食に関する指導の視点から授業内容を捉え、複数の学びを取り入れていることの3点を実施していることが明らかになった。年間指導計画を活用し、一つの活動に複数の学びを取り入れることで、授業時数が定められていないために生じる食に関する指導の時間の確保における困難(片淵・中村・本田,2010;村上ら,2012)の解決を図っていた。また、複数教師で案を出し合うことで、担当する教師の興味や関心、力量によって内容が左右されてしまう(神谷・久世・中村・平島・磯部,2014)といった指導内容の課題や、学校・教員間の理解や認識の共通化が必要である(上田・小橋・山下・田中・細田,2014)という連携における課題を解決し、食に関する指導実施の推進に繋がっているこ

とが明らかになった。

よって、学校の教育活動全体を通して食に関する指導を実施するためには、個々の教師が指導のイメージを持ち、必要性を強く感じることで、そして年間計画を活用し、一つの活動に複数の学びを取り入れつつ複数の教師で授業を検討することが求められると推察された。

### 文献

- 片淵結子・中村修・本田藍(2010)食に関する指導の現状と課題—栄養教諭・学校栄養職員・学校栄養士のアンケート調査から—。長崎大学総合環境研究,12,1,79-88.
- 厚生労働省(2004)「食を通じた子どもの健全育成(—いわゆる「食育」の視点から—)のあり方に関する検討会」報告書について。厚生労働省,2004年2月,<<http://www.mhlw.go.jp/shingi/200402/s0219-4.html>> (2015年12月29日)
- 村上淳・松下(金尾)暢子・山本由理・笠間基寛・射越亜弥子(2012)学校給食における食に関する指導や食育の実態などに関する調査研究—香川県の場合—。中国学園紀要,11,133-140.
- 野田智子・鎌田尚子(2012)特別支援学校肢体不自由部門に通学する中高等部生の障害と生活習慣の実態。北関東医学会,62,3,261-270.中央教育審議会(2004)食に関する指導体制の整備について(答申).
- 三反田和人(2011)特別支援学校(肢体不自由)における食育。肢体不自由教育,202,10-15.
- 鈴木洋子(2015)教員養成課程における学校給食に関する指導の必要性—教員志望学生及び小学校教員の給食指導に対する意識からの検討—。奈良教育大学紀要,64,1,155-159.
- 東京都立東療育センター(2010)肢体不自由児(者)の方への情報提供を行い、生活支援を目指します。東京都立東療育センター、メールマガジン 2010年5月号。
- 土屋裕美・山下房江・青山妙子(2013)特別支援学校(視覚・知的・肢体不自由)教員の食育に対する意識と食育実践の現状と課題—食育に関するアンケート調査から見えてきたもの—。日本食育学会,7,4,285-292.
- 上田由喜子・小橋麻衣・山下治香・田中都子・細田耕平(2014)教員志望学生の食育に対する意識。日本食育学会誌,8,3,181-189.
- 山田貴子(2008)特別支援学校高等部における家庭科授業のあり方—知的障害や肢体不自由の各障害に応じた効果的な指導について—。石川県指導者養成研修講座 研修報告(概要)。